

太宰治における弱者のユートピアについて

西川長夫

太宰治を主題にした映画を作りたいので京都でお会いしたい、といった趣旨のお手紙をいただいたのはたしか2月の末だったから、もう4ヶ月近くも前のことですが、今日はじめてお二人に会えて喜んでます。そのお手紙の中に、私がフランスで出した戦後小説論『*Le roman japonais depuis 1945*』（『日本の戦後小説 廃墟の光』）に収めた太宰治論「太宰治と弱者のユートピア」について触れた文章があって、私はまったく初対面のお二人から手紙をもらうことになった理由がわかると同時に少し驚きました。この本では1984年にカナダのモントリオール大学でフランス語でしゃべった講義がそのままとめられていて、フランスでの出版は1988年ですが、それでも20年近くが経っています。私はかなり長い太宰論を書いたことは覚えていましたが、その内容もそれに「弱者のユートピア」というタイトルをつけたことも完全に忘れていました。私自身が忘れていた書物を思い出させてくれただけでなく、それがお二人の映画制作の何らかのきっかけになったのであればこんな嬉しいことはありません。

今日ここで何か太宰についてお話しすることになって、私が第一にやったことは、まず自分の文章を再読すること、それから最近20年ほどの太宰研究の動向や太宰に関する文学的状況（特に読者の問題）をおさらいすること、つまり一種のリハビリを行う必要がありました。それでリハビリの手始めに本屋にでかけて太宰治の文庫本を10冊ぐらい買いました。そして奥付をみて何刷になっているかを調べてみました。売れ行き、つまり読者数の問題ですが、例えば平成元年に出た『人間失格』の文庫本は、15年間に百何十刷とか、たいへんなものです。10年前に日本で一番売れている作家は太宰治で、第二位が夏目漱石でした。最近の数字はわかりませんが、太宰が最もよく読まれている作家の一人であることに変わりはないと思います。社会的な変化が激しく、読者層の変動も大きい中で、一人の作家が常に熱狂的に読み続けられているのは何故でしょうか。その謎をお二人の映画は解いてくれるのではないかと思います。

木村一信さんにいただいた『二十一世紀旗手・太宰治』をはじめ、新しく出た研究書にも少しは目を通しました。さまざまな面白い解釈や小さな発見はあったけれど、この20年間、太宰解釈の上であまり大きな変化はなかったのではないかと、というのが私の受けた印象です。間違っていたら後で教えてください。太宰問題を改めて考える上で、一番面白かったのは今日のお二人のフランスのシネアストのお話です。映画化の観点から、太宰の両義性や文体（エクリチュール）と人称の問題が実に興味深く語られていて、これはすごいなと思いました。何らかの形で是非翻訳し活字にしてほしいと思います。その他に、少し古いのですが吉本隆明の太宰論がけっこう面白かった。今日のお二人のお話とも重なる部分が多いので、最初にその話をさせていただきます。

吉本隆明のこの太宰論は「シンポジウム津軽・弘前 '88の記録」に収められたものです。

吉本の話は3点ほどあって、その第一は太宰の自殺願望にかかわること。吉本の言い方によると、太宰は生と死の境界を簡単にすり抜けてしまう「生と死の境を越え易い資質」を備えていたということになります。死への願望が「抑圧に対する耐え方」のひとつと型をなしており、そういう意味での変身願望がカフカとの対比で面白かった。僕自身はこれも20年ほど昔に、スタンダールの40を超える遺書と300を超える偽名を分析して、スタンダールのロマネスク世界との関連を論じたことがあって、その点でも面白かった。

第二は、太宰の作品は「人称のドラマだ」という指摘です。吉本は『猿面冠者』を例に、1人称から6人称までを挙げて、その表も作っています。先ほどのお二人の話にかかわってきますが、1人称で書かれている私小説の解体という願望があって、私をさまざまな人称に変化させて、人称のドラマとしての作品を書いている。太宰の「アイロニー」や「道化」の問題もそれにかかわっているという指摘です。

第三の点は、「太宰にとって文学・芸術はそれ自体が倫理であった」ということです。そしてそのことは太宰の場合、自分は滅亡する人間や階級の象徴を演じるのだ、つまり「負の十字架」を背負う役割を演じるのだ、という考えにつながっている。もっとも時代によって少し変化があって、戦中の太宰は「健康」であったという指摘はその通りだと思います。戦争中は大部分の作家や詩人が健康で道徳的で、つまり愛国的になってしまうのですが、太宰も例外ではなかったということです。

それからもうひとつ、これは講演ではなくて、その後の討論の場での発言ですが、吉本は太宰の「サービス精神」を取り上げ、太宰が「売文の最低限のモラル」である「旅芸人の精神」に徹していたことを強調しています。これと最も対照的な「サービスのない小説」の代表として挙げられているのは大江健三郎で（太宰の場合は志賀直哉）、これはほとんどバカ呼ばわりですね。

その後、20年前の自分の太宰論（「弱者のユートピア」）を読み直して、今日は今の自分であればどう書き直すかという話をするつもりでした。ところがどうもうまく書き直せない。「まあこれでもいいんじゃないか」というようないいかげんな話です。もっとここで話を止めることもできないので、あと二、三。私たち現在の読者の問題を付け加えたいと思います。

まず第一に、太宰の「時代」の問題です。戦前、戦中、戦後の太宰が存在するということがですね。太宰は戦中は「健康」になった、と先ほどの吉本の指摘にもありました。「健康」になろうとして一見誠実に戦争に協力する。私は割りに最近、「作家たちの12月8日」と題した文章を書いたのですが、日本のほとんどすべての作家や詩人が、太宰治や坂口安吾も含めて、開戦の報せに感動して愛国的開戦派になる。「健康」を取り戻そうとするわけです。開戦の日がどんなに爽やかであって、その瞬間に自分がいかに生まれ変わったかということ、ほとんどすべての文学者が書いています。そして戦後ほとんどすべての文学者が、そのことに口をぬぐい、沈黙を守って、戦後という新時代に適応してゆく。太宰の場合もこのことはもう少し追及してもよかったのではなかったか、と今は思います。だが結論的に言うと、常に両義的な太宰はそうした追及のもっともしにくいタイプの作家であって、戦前を批判する視点を持ち、戦中の自分を「恥」として批判する作品もあり、戦後デモクラシーを全体として批判する観点も持ち、そしてそのことが現代も同じように大勢の読者をもっている理由の一つになっていると思います。

第二に「家」の問題ですが、「家」が太宰の重要なテーマであったことは言うまでもありません。戦前戦中を通じて、「家」は常に「国家」と結びつき国家と一体のものでした。そこからどうやって逃れるのか。太宰の父は衆議院議員から後には貴族院議員になる家柄です。これは安吾の場合も同じですね。その「家」が戦後いくつかの段階も経て崩れていく。戦後、太宰に「家庭の幸福」と題された作品があります。戦争中、家あるいは家庭は戦争に出る兵士を送り出す装置でした。戦後それは経済成長の中で経済戦士を送り出す装置になってゆきます。「家庭の幸福」はそうした家や家庭のもつ煩わしさや欺瞞を描き、「家庭は諸悪の根源」という言い方で決め付けています。坂口安吾の家観も厳しいもので、戦争の根源は家制度にあり、人類の未来は「家制度に代わる新しい秩序」と「世界単一国家」の樹立にかかっていることを主張しています（「戦争論」）。もっともだまされてはいけないので、家や家庭は彼らの孤独な魂が帰ってゆく安らぎの場でもあったことを、つくくわえておく必要があるでしょう。

現在、経済的な格差が拡大していく一方で、いわゆる「家庭の崩壊」といわれる現象の進行もいっそう顕著になってきています。日本社会は毎年3万人の自殺者を出している。昨日の新聞にも出ていましたが、ニートやフリーターと呼ばれる若者たちの数は合わせて300万人に達するようです。かつての産業戦士、経済戦争の兵士たちを送り出した家庭が崩壊してきて、そこから放りだされた人たちの不安が太宰の不安と重なってくる状況があると思います。学校や家庭や職場や地域社会がかつての機能を果たせなくなった状況のなかで、新しい人間的なつながりの形が求められており、そうした状況の中で「弱者のユートピア」をもう一度考え直すことができるのではないかと。以上は20年ぶりに自分のテキストを読み直した者の自己弁明ということになるでしょうか。